

七人の花嫁

野村胡堂

—

「やい、八」

「何です、親分」

「ちよいと顔を貸しな」

「へ、へ、へッ、こんな面つらでもよかったら、存分に使つて下せえ」

「気取るなよ、どうせ身代りの贖首にせくびつてえ面じゃねえ、顔と言つ

たのは言葉の綾あやだ。本当の所は、手前てまえの足が借りてえ」

捕物の名人と謳うたわれるくせに、滅多めったに人を縛たつたことのない御用聞の銭形の平次は、日向ひなたでとぐるを巻まいている子分のガラツ八にこんな調子で話しかけました。

松は過ぎましたが、妙なまに生暖あたたかいせいにか、まだ江戸の街にも屠蘇とその酔よいが残のこっているような昼下がりが、中年者の客を送り出すと、平次はすぐ縁側へ廻まわって、ガラツ八を居睡いねむりから呼び起たしたのです。

「へエ——、どこへ飛とんで行きゃアいいんで——」

「今の話を聞きいたろう、あの客が長々と話はなしこんだ——」

「いいえ」

「聞かねえ？」

「人の話なんか聞きやしませんよ、そんなさもしい八さんじゃねえ」

「いい心掛けだ、——と言ってえが、実は居睡りをしていたんだろう」

「まアそんなところで、——何しろ日向は暖えしあつたけ、懐は涼しいし、じつとしていりゃ、睡くなるばかりで——」

「呆れたものだ。まアいいやな、俺が詳くわしく復習さつてやろう」

「お手数でもそう願いましうか」

「黙って聞けよ」

「へエ——」

平次の態度には例いっにも似気なく真剣なところがあるので、無駄の多いガラツ八も、さすがに口を緘つぐんで、親分の顔を見上げました。

「今此処ここへ見えたのは、十軒店けんだなの八百徳やおとくの主人だ。一人娘のお仙を、同じ商売仲間の末広町の八百峰の跡取息子に嫁にやるについて、俺の力が借りたいと言うのだよ」

「悪い虫でも附いているんでしよう、どうせ当節の娘だ」

「そんな話じゃねえ。聞けば近頃、神田から日本橋へかけて、花嫁がチヨイチヨイ消えてなくなるそうだな」

「それなら聞きましたよ。祝言の晩に行方知れずになった花嫁は、暮からこつち、二人くらいあるでしょう。どうせ言い交かわした男でもあつて、いよいよという晩に花嫁姿で道行を極めたんじゃありませんか。土壇場どたんばに据すえると女の子は思いの外強くなりますからね」

「ところが、八百徳の主人の話では、消えた花嫁が三人もあるそうだよ」

「妙に気が揃そろったものですねえ」

「そんな暢気のんきな事を言っちゃいられない。一と月や半月のうちに、花嫁が三人も行方知れずになるといふのは、少し可怪おかしくはない

かな、八」

「そう言えばそうかもしれないね」

「どこの家でも、娘に男があつて逃げたと思ひ込んでゐるから、世間体を憚はばかつて表沙汰にはしないそうだが、八百徳の主人は、どうも自分の娘も消えてなくなりそうで心配でたまらないと言うんだよ」

「成程ね」

「そこで手前てめえへ頼みというのは――」

「そのお仙とかいう娘に、虫が附かいてるかどうか嗅かぎ出して来いというんでしよう」

「そんな氣障きざな用事じゃない。娘の身持は八百徳の主人が引受けるって言うから、差し当りそれを信用するとして、手前はソツと嫁入の行列に躓ついて行って、一と晩見張みはりつていさえすりゃいいんだ」

「成程、こいつは、嫌な役目だ」

「何だと、八」

「知恵も錢も要らねえ代り大した辛抱しんぼう役だ。花嫁に躓ついて行って、三々九度から、床盃とこさかずきまで見せられた日にゃ、全く樂じゃないぜ」

「贅沢ぜいざくを言うな」

「これでも独り者ですぜ、親分」

「独り者だから、そんな場所によく眼が届くんだ、役不足なんか言っちゃならねえ」

「へッ、助からねえな」

ガラッ八は文句を言いながらも、頭の中では、その晩の冒険に對する、いろいろの計画をめぐらしておりました。

二

日本橋の十軒店けんだなから神田の末広町まで、自動車を飛ばせば五分くらいで行ってしまえますが、昔の花嫁の行列はそんな手軽なわ

けにはゆきませぬ。

町内の駕籠清かごせいから別仕立の駕籠が五挺、花嫁と、仲人夫婦なこうどと嫁の附添はきと、親類の重立った者が乗って、あとは定紋じょうもんの附いた提灯ちようちんを挟んで、思い思いに歩くところですが、時節柄物騒はさといふので、駕籠だけを飛ばせ、仕出しはゆるゆる後から練ねって行こうといふ寸法、韋駄天いだてんのような粒選りの若い者に担かつがせた五挺の駕籠は、江戸の街の宵霜よいしもを踏んで、丁度明神下ねずみやから鼠屋横町へ抜けようとした時でした。

闇の中から不意に飛んで来たのは、一本の棒、これが花嫁の乗った真ん中の駕籠の、先棒またの股の間へサツと入りました。

「あッ、何をしやがる」

と言つた時は、もう見事に突んのめつて、弾みはずの付いた駕籠は、
往来の真ん中へドタリと落されました。

「それ出た」

それくらいのことには心得た後棒の若い者、息杖いきづえを取つて花嫁の
駕籠の前に立ち塞ふさがりましたが、相手はその出鼻くじを挫くじくように、
横合から飛出して、胸のあたりをドンと突きました。

何分宵闇の中に起つた不意の出来事で、それに、曲者は恐ろし
い手練しゅれん、後棒の若い衆は思わず跳ね飛ばされて尻餅しりもちをつくと、そ
の間に飛付いた、第二、第三の男、物をも言わずに花嫁の駕籠を

引つ漑さらつて、引摺ひきずるように、横手の狭い路地の口へ――。

「野郎、待ちやがれ」

先棒ようやは漸ようやく起き上がりましたが、向脛むこうすねを強したたかにやられて、急むには動おろけません。前後の四挺の駕籠は、この時漸おろく下されて、八人の若い者が、

「何をしやがる」

息杖を振りかぶって、八方から花嫁の駕籠を追いかけました。

幸い路地は三尺の抜裏で、駕籠は容易に通りません。花嫁の駕籠は少し斜ななめに、その口を塞ふさいだまま放り出されたところへ、十人の威勢のいいのが、十ぼんの息杖を振りかぶって、すかさず追います。

がったのでした。

別に町駕籠を仕立てて、花嫁の行列の直ぐ後に続いたガラツ八は、この騒ぎを見ると転がるように降り立ちました。

「到頭出やがったか、逃すな」

それでも商売柄、一番先に路地の口に飛付きました。が、花嫁の駕籠が入口を塞いで急には曲者の後を追うことも出来ません。

「えッ、面倒臭えめんどうくせ」

駕籠を飛越して路地の闇に入ると、鼻の先に通せん坊をしたのは恐ろしく巖乗がんじょうな木戸。

「やい、ここを開けろ」

押しても叩いてもビクともすることではありません。

そのうちに、四挺の駕籠から飛降りた仲人夫婦やら附添の者、これは一番先に花嫁の安否あんびということが頭へ響きます。

飛付くように駕籠の垂たれを押上げて、

「お仙さん、驚いたろう」

と見ると、中は空っぽ。

「あッ」

咄嗟とっさの間に、駕籠の中から花嫁は攫さらわれてしまったのでした。

八百峰の近くまでたどり着いて、いくらか心持に隙すきの出来たところを狙ねらったやり口や、抜裏を利用して、駕籠で入口を塞ふさいだ細工さいくなどを見ると、容易な曲者ではありません。

「親分、何んとも申訳がねえ、俺は腹でも切りてえ」
すっかり恐入って報告をする八を宥なだめるように、

「いや、その様子では俺が行っても失敗しくじったかもしれねえ。手離せねえ用事があったにしても、手前てめえ一人やったのが間違まちがえだ」
平次はそんな事を言っております。

時を移さず、鼠屋横町ねずみやの抜裏から、八百峰の立ち騒ぐ人達の様

子、驚き呆れるあき十軒店の八百徳まで廻って見ましたが、手掛りらしいものは一つもありません。

「六尺棒を若い衆の股またの間に投げ込んだ手際てぎわじゃ、ザラの泥棒や人さらいじゃねえ——」

という噂を聞いたのが精々、平次は何の得るところもなく、曉方近くなつて引揚げて来ました。

その頃は、諸大名の門番や、見付の番人は言うに及ばず、渡り中間、軽輩けいはいな士分の者まで、一種の武器として、棒を使ったもので、駕籠屋の股へ棒を放り込むくらいの事は、ちよつと心得のある者なら、誰だつて出来ます。

花嫁は評判の堅い娘で、八百降の総領とは許嫁同士、色恋の道いいなずけ行でないことは、口善悪くちさがない近所のお神さん達までが牡丹餅判ぼたもちぼんを捺おします。

それに、盗まれた花嫁は、暮から勘定して四人目、手口はそれぞれ違いますが、兎に角、余程深い企たくらみのあることは、鼻の良い平次には、判り過ぎるほど判ります。

それから三日目。

「親分、聞きなすったか」

朝のうちから、ガラツ八が怒鳴どなり込んで来ました。

「何だ、八。相変らず騒々しい」

「石原のも失敗しくじったんですとさ」

「何？」

「昨夜柳原河岸で、石原の利助親分があの大おほきい眼を光らせている中から、五人目の花嫁が攫さらわれたって言いますぜ。材木河岸の美倉屋みくらやの娘で、今度はたいした容貌きりようだ」

「フーム」

「これで五分と五分だ。石原のでさえ馬鹿にされたんだ、八五郎ばかりが失敗しくじったんじゃないやねえ——、態さまア見やがれた」

「馬鹿野郎ッ」

「へッ」

「石原の兄哥が失敗ったからって、手前のドジの言訳になるか」

「へエ——」

「俺はそんな心掛の人間は大嫌いなんだ。こっちはこっち、石原の兄哥は石原の兄哥だ。人の失敗を喜ぶような野郎は、俺のところにいて貰いたくねえ」

「へエ——」

「手前は人間はガラガラして、まことに出来のよくねえ野郎だが、わるげ悪気のないところだけが取柄とりえだったんだ」

「へエ——」

平次の怒りは、何時になく峻烈しゅんれつを極めました。さすがのガラッ

八も、あまりの風向に、暫くは口も利けません。

「さア、出て行きやアがれ。俺はそんな根性の曲った野郎を見ていたかアねえ」

「親分、成程、そう言われてみると、あつしが悪かった。勘弁しておくんないまし」

「ならねえ」

「そう言わずに、親分」

「詫^わびを入れたきやア、石原の兄哥へ行ってそう言ってみろ」

「――」

「間^ま誤^ご間^ま誤^ごしやがると、向^む脛^{こう}をカッ払^はうぞ。石原の兄哥の手柄^てを

「喜ぶような心持になったら、改めて逢ってやる」

あまりの剣幕に驚いたか、ガラツ八は二つ三つお辞儀をすると、
怯おびえた猫の仔のように、後ずさりに格子の外へ飛出してしまいま
した。

日頃温和な平次が、こんな怒るのは、何か仔細しさいのあることで
しよう。人のいいガラツ八は、押して聞き返す勇氣もなく、妙に
諦あきらめ兼ねた涙ぐましさで、何処いずこともなく立去ってしまいました。

四

間もなく、第六人目の花嫁が盗られました。新革屋町しんかわや（今の松下町）の染物屋の娘お辰たつ、同じ神田鍋町の酒屋伊勢直いせなおへ嫁入りさせましたが、どこでどう摺り替すえられたか、向うへ行つて、綿帽子わたぼうしを取つて見ると、花嫁が變つていたといふのです。

家を出て駕籠に乗せるまで、仲人なこうどは花嫁から手を離さず、伊勢直への道中は、時節柄出入りの頭かしらや職人に頼んで嚴重に守らせ、駕籠を下りると、仲人の外に、多勢が人垣を作つて送り込んだのですから、途中で摺り替すえられる筈は万に一つもあるとは思われません。

その上、何ということでしょう。この晩は双方そうほうから頼み込まれ

て、特に銭形の平次が乗り出し、宵から嫁の姿を見張って一刻も綿帽子から眼を離さなかつたのです。

嫁のお辰は、里方の染物屋にいるうちに替えられたに相違ありませんが、それが、どこで、どうして入れかわつたか、さすがの平次にも、全く見当が付きません。

お辰の代りに、花嫁に仕立てられたのは、どこから来たともなく、二三年この方、かた神田あたりを彷徨い歩く女乞食のお六、これは金看板の白痴ばかで、何を訊いても一向取り止めのない始末です。

「お前はどこから——誰が連れて来たんだ。言わないか」
「言わないよ」

「言わなきやア打つよ、呆あきれた馬鹿だ」

寄つてたかつて責めると、

「黙つていさえすれば、伊勢直の若旦那のお嫁さんにするつて言われたんだ。言うもんか」

この調子では全く手が付けられません。

もつと

尤も、評判娘のお辰とは似もつかぬ醜い容貌で、年も三十幾つかは越したでしょう。綿帽子さえなかつたら、お辰と間違えられ
るお六ではありませんが、女乞食にしては様子が如何にも華奢きやしやな
のと、一言も口を利かなかつたので、伊勢直へ連れ込むまで、誰
も気が付かず_にいたのでしよう。

それよりも重大な原因は、近頃の物騒な噂に怯えて、人間という人間が、あまりに緊張しきっていたために、思わぬ心理的欠陥けっかんに乗ぜられたのでしよう。何しろ伊勢直は煮えくり返るような騒ぎ、折角宵から大目玉を剥むいている平次も、今度という今度は、すっかり面目玉を踏みつぶしてしまいました。

なおもお六を捉つかまえて、嚇おどかしたり、すかしたり、一と晩がかりで責め抜いてみると、

「誰やら知らない人が来て、伊勢直の若旦那と添そわせてやるからと言って、知らない家へ引摺ひきずり込んで、湯へ入れて、化粧をさせ、紋付を着せて、伊勢直の裏口からそつと引き入れた——」

というだけは解りましたが、お六の足りない脳味噌のうみそは、問い詰められると混乱するばかりで、『誰やら』という人相も『引入れられた』という家も、まるで見当が付きません。

解ったことと言うと、お六の着ていた紋付や帯は、お辰の着ていた品と、色も柄もそっくりその儘というほどよく似ておりますが、実は、今までに誘拐かどわかされた五人の花嫁の身に着けた品のうちから、お辰の嫁入支度と似寄によりの品を集めたもので、少し気を付けさえすれば、誰にでもその違いは判る程度のものであったことです。

「銭形の親分、御覧の通りの始末だ。誰の所為せいというわけではないが、どうか嫁を探してやって下さい。六人の花嫁と一緒にさが

して下されば、それに越した事はありません。万一の事があつたら——」

伊勢直の主人はゴクリと固唾かたずを呑みました。

「面目次第も御座いませぬ、平次の男に賭かけて、キツと探し出してお目にかけます。三日といたいたいが、せめて後五日、この月中には何とかいたしましょう」

言葉は柔やわらかいが、平次の胸の中には、勃然ぼっぜんとして、命がけの決心が定つたようです。後指をさされるような心持で、その儘外へ——。騒ぎを聞いた近所の人が往来へ垣を築いて、闇の中には物々しい囁きが微風のように動きます。

五

「おつ母ア、家にいなさるかい」

「あら親分」

お静は平次を迎えてイソイソと立ち上がりました。平次の許嫁いいなづけになつてからは、両国の水茶屋へ出るのは止してしまつて、八丁堀の与力、笹野新三郎のところへ、手不足の時だけ手伝うのが精々、たいてい大抵は家にいて、母親を相手に、嫁入の心支度ともなく、針を持つ日の多いこの頃だったので。

この時、お静は、平次と九つ違いの十八、厄前やくまえに祝言の盃だけでも済ませるつもりで、仲人なこうどまで立てておりましたが、お上の御用の多い平次は、せめて春永にでもなつたら——と、一日延ばしに延ばしていたのです。

美しさも賢かしこさも申分なく恵まれたお静は、平次の顔を見ると、ポツと顔を紅らめて立ち上がりましたが、それを抑おさえるように、

「まア、親分。よくいらっしやいました」

次の間から母親が出て参ります。

「すっかり御無沙汰をしちゃった。お変わりもないようで、こんな結構なことはねえ。ところで今日は少しお願いがあつて来ました

が——、丁度いい塩梅だ、静い坊も一緒に聞いておくれ」

「まあまあ、御用の多い身体を気の毒な、そう言つて使いでも下されば、こつちから伺つたのに」

「飛んでもねえ、年寄を歩かせるようない話じゃないんで——、
実は」

平次は言いにくそうに頬ほおを撫なでました。

「これは仲人から言つて貰うのが順当だが、それでは俺の心持が
済まねえ」

母娘は黙って顔を見合せました。重大な意味のあるらしい、平次の真意を測り兼ねたのです。

「ざつくばらんに言ってしまったえば、一日延ばしにしていた私とお静の祝言を、わけがあつて、この月のうちに運びたいと思うんだが、どんなもんだらう」

「えッ、早いに越したことはありませんよ。私もお静も、親分がその気になつて下さると、どんなに嬉しいかしれないが——」

母親は真っ紅になつて差し俯向くお静を振返つて、こう続けました。

「この月といつても、あと三日しかないから、支度がとても間に

合わないよ、親分」

「おっ母ア、それも承知だ。が、あと三日のうちに祝言の真似事まねごとだけでもしないと、俺の男が立たないことがあるんだ」

「親分の男が？」

「そう言っただけでは解るまいが、——知つての通り、近頃彼方あっち此方こっちの花嫁が盗まれる。それも、神田一円と日本橋の数力町かけての祝言ばかりを狙ねらって、暮くれから六人も行方知れずだ。神隠しに逢うのか誘拐かどわかされるのか、兎も角容易なことじゃねえ」

「そうだってね、親分」

「笹野様もことの外御心配で、平次何とかしろと仰しやるが、こ

ればかりは雲を掴むようで、どうにも手に了えねえ。神隠しなどという言訳は、お上筋は通らないから、十手捕縄を預かる者から言えば、これはどこまでも悪者の仕業に相違ねえ」

「ガラツ八も石原の兄哥も失敗ったのを承知で、伊勢直の祝言へ行つて見張ったはいいが、この平次までが見事に裏を搔かれ、尻尾を巻いて引下がってしまったようなわけだ」

「世上の人が後指をさしているようで、どうにも外へ出る勢もねえ。お願いというのはここだよ、おっ母ア」

「この節はすっかり怯おびえてしまつて、この界限かいわいには猫の子の祝言もねえ。愚ぐ凶ぐ愚ぐ凶ぐしているうちに、相手が見切りを付けて、六人の花嫁を纏まとめて殺あやめるとか——そんな事はない迄も——、遠国にでも持出されたら手の付けようがねえ。ここでもう一度相手から仕掛けさせて、動きの取れぬ証拠を握るためには、たった一つでもいいから祝言が欲しいんだよ」

「俺の眼の前で花嫁を搦すり代かえた相手だ。平次が嫁を貰うといつたら、万に一つも黙って見ている筈はねえ。お静坊しじまぼうに、幾度も危

ない思いをさせちや気の毒だが、一番花嫁になつて誘拐されて、かどわか
曲者の巢を探つて貰うわけには行かないだらうか」

折入つての頼み、男の額には冷汗さえ浮べておりますが、あまりの事に、母親は返事の仕様もありません。暫く胡麻塩ごましおになつた首を襟えりに埋めて、何を考えともなくぼんやりしてしまいました。

「親分、そんな事でお役に立つなら、どうぞ私を使って下さい」
祝言をしてとは言いませんが、お静は顔を上げて、平次よりは寧ろむし、母親の心持を測り兼ねた様子でこう言いました。はか

「お静、何を言うのだえ、お前」

「いえ、お母さんの御心配は御尤もですが、私は親分のお力を信ごもつと

じきつております。高田お薬園の手入の時だって、お茶の水の空屋に吊つるされた時だって、親分は見事に救つて下すつたじゃありませんか。ね、お母さん、どうぞ私を、今晚にも親分のところへやつて下さい」

母親の膝に手を置いたお静、それを揺ゆすぶりかげんに、少し甘える調子でせがんでおります。平次はこの健気な心意気に打たれて、両手を合せて拝みたいような心持で、黙って差控えました。

六

その翌々日、平次はお静と祝言の盃をあげることになりました。
仲人はなこうど笹野新三郎の用人、小田島伝蔵老人、いずれ春にはこしいれ輿入する筈で、ボツボツ支度を心掛けていた矢先ですから、貧しい調度ながら、一と通りのものは揃っております。

お静の家から平次の家までは、ほんの二三町、駕籠にも車にも及びません。平次とお静がた強つて断るのも聞かず、小田島伝蔵老人夫婦の外に、平次のほうばい朋輩やら子分やら二三人、花嫁姿のお静を遠巻にして、平次の家に送り届けたのは、その晩のまだ宵の内でした。

ガラッ八がいたら、さぞとんぎょう頓興な声で、一座を賑わしてくるだ

ろう——と思うと、見えざる相手の仕掛を待つて期待と闘争心に燃える平次の胸にも、何かしら一脈の淋しさが冷たい風のように吹き入ります。

新妻を攫さらわせるつもりさの平次、祝言の席から誘拐かどわかされるつもりのお静、二人の気持を薄々読んだ客——この祝言は、まことに不思議なものでした。

どうせ裏店住まいうらだなの平次、知恵や俠気きょうきはあつても、金っ気などはろくにありません。それでも花嫁を迎える用意だけは一と通り調べて、借り物ながら屏風びょうぶを廻し、島台しまだいを飾り、足の高い膳や、絹物らしい座蒲団、時節柄寄せ集め物の火鉢まで、どうやらこう

やら揃いました。

二た間打っこ抜いた室が式場で、その裏が花嫁の支度部屋、長屋の者が集まって、日出度く三三九度が済むと、『高砂や——豆腐イ』と言った調子のが始まります。

紋付姿の平次も立派でしたが、それにも増して、お静の花嫁姿は鮮やかあざでした。このまま、お開きとなれば、何も彼も無事に納まります。六人の花嫁を盗んだ曲者も、さすがに銭形の平次の嫁には手を付けられなかったのでしょう——か。

七人の花嫁



©2017 萩 柚月

やがて花嫁は次の間へ下がりました。怪あやし気げながら、紋付を脱いで、色直しということになります。盃は幾いくまわ巡りかして、さんざめく一座、誘拐かどわかしも何も忘れてしまつて、大分いい心持になつて来ましたが、どうしたことか、暫く経つても、お静の姿が見えませ
ん。

「ちよいと」

髪結かみゆいのお鶴さんが、屏風びょうぶから顔を出して小田島老人を呼びまし
た。

「嫁さんはどうしたんだい」

「先程から、お見えになりません」

「何？」

一座は騒然として立ち上がりました。頭から被かぶった風呂敷でもかなぐり捨てたように、乱酔が一遍にさめてしまったのです。

「色直しの着付けを済まして、御不浄ごふじょうへいらつしやつたようですが、それつきり見えません」

界限でよく知られた、名人の髪結かみゆい、額から右の眼へかけて赤い痣あざのあるお鶴が、その醜みにくい顔を歪ゆがめておろおろしております。

「到頭とうとうやりやがったな」

婿姿むこすがたの平次、忙しく羽織をかなぐり捨てると、足袋たびはだし跣の儘パツと裏庭へ飛出しました。誰が開けたか、路地へ抜ける木戸はバタ

バタになって、そこには夜目にもほの白く、まがいのもの贗物ながら、たいまい玳瑁の
かんざし簪が一本落ちております。

七

平次の活動は、本当に火の出るようでした。六人の花嫁を救い出すために、あらゆる物を賭かけてしまった平次は、この上失敗を重ねるようなことがあれば、死んでも申訳が立たないことになるのです。

世上の噂、笹野新三郎の督とくれい励、それは暫く我慢するとしてもお

静の母親の嘆きは、一刻も見てはいただけません。それに、あの自分のために進んで、死地に飛込んだお静の、清浄無垢な美しい身体を考えると、賽ころの目一つに、あらゆる身上を張り込んだ人間のように、平次は腹の底から胴顫いを感じるのでした。

平次は今までも決して遊んでいたわけではありませんが、もう一度必死のスタートを切って、嫁入と関係のある、あらゆる商売を調べて見ました。第一番に、神田日本橋の呉服屋、越後屋、白木屋をはじめ、筋の立ったところを全部当って見ましたが、江戸中に毎日、幾つあるか判らない祝言のうちから、神田日本橋のを選り出して聞くなどは、呉服屋へ行ったところで、何の足しにも

ならないことが判つただけでした。

次は鰹節屋、かつおぶしや小間物屋、たんす箆笥屋、さかなや諸道具屋、肴屋、酒屋、いや

しくも嫁入の御用を勤めそうな店は、自分か子分かが一と通り廻つて見ましたが、どこにも怪しい節などはなく、又婚礼の日取などを聞き廻つた人間の噂は一つもありません。

併し、しか七人の花嫁誘拐のかどわかし手口は、ことごと悉く周到な用意と、長い間の計画でやったことで、ぐうぜん偶然の廻り合せで、行当りばつたりな仕事でないことはよくわかつております。

念のため、一度は諦めた女乞食のお六を、あきらその巢にしている明神様の裏手の、建て捨てた物置小屋へ見に行きましたが何とした

ことでしよう、これは、見るも無慙むざんに縊くびり殺されて、ボロと藁屑わらくずの上に、醜みにくい死骸を横たえております。

「しまったッ、こんな事なら、もう少し口を利かせるんだった」と言つたところで追付きません。

今度ばかりは銭形の平次ほどの者も、全く持て余してしまいました。

下町中の質屋という質屋、古物屋という古物屋は、子分の者を飛ばして詮索せんさくしましたが、暮から此方このかた、嫁入道具などを持ち込んだ者は一人もありません。

こんな空むなしい努力を続けているうち、たった一つ気の付いたこ

とは、石原の利助と、ガラツ八が、平次とほぼ同じ調べ口で、
あっちこち彼方此方を探し廻っているということだけでした。

八

平次は、お静にいろいろのことを言い含めて置いた筈ですが、
不思議なことに、かどわか誘拐されたお静からは、何の合図もありません。

お静の襟や帯揚の中には、格子や雨戸の隙からでも投れるよう
えりに、平次宛に書いた手紙が、幾本も用意してあった筈ですが、ど
あてんな場所に閉じ籠められたか、そんなものは、一つも平次の手許

に届かなかつたのです。

そればかりでなく、お静の帯の間や、懐ろの中には小さい竹笛たけぶえが幾つか潜ひそめてある筈です。その笛を引つきりなしに吹いてくれさえすれば、平次の子分達が聞込まない迄も、近所の人が変に思つて、井戸端の噂ぐらいに上らない筈はありません。

平次は夜となく昼となく、神田から日本橋を、へとへとになるまで彷徨さまよい歩きました。途に落ちた鼻紙にも驚き、按摩あんまの笛の音にも胆きもを冷して、本当に気の触れた犬のように馳け廻つたのです。しかし何もかも無駄でした。もしかしたら、六人の花嫁と一緒に、美しいお静の死体は、今日にも大川に浮くかも知れない――

といった恐ろしい幻想に、平次は休むことも眠ることも出来ない有様になっておりました。

犇々ひしひしと身に迫るせまのは、食い入るような恐ろしい後悔です、疲れ果てた足を引摺るはように、聖堂裏から昌平橋しやうへいばしを渡って柳原の方へ出ようとすする平次の、塩垂れ果てた肩しおたへ、後ろからソツと手を置いたものがあります。

「親分、御心配ですね」

振返ってみると、髪結のお鶴ます、醜い顔ですが、それでも人のいい笑いを浮べて、慰め顔なぐさに、平次の顔を差しのぞきます。

「あ、お鶴さんか」

平次は夢見るように立止まりました。

「お静さんの行方は、少しも判りませんか」

毛筋を鬢けすじに差して、襟の掛った小袖、結び下げた黒縹くろじゆす子の帯は、

少し猫じゃらしに尻しりを隠します。

「困ったよ、お鶴さん。お前さんにも心当りはないだろうか」

「ホ、ホ、ホ、銭形の親分さんがそんな事を仰おつしゃつちや困るじゃありませんか。でも、今度ばかりは、本当にお気の毒ねえ」

親切とも、皮肉とも聞える言葉を空耳に、平次はお鶴に伴ついてその家の前まで行っておりまして。

「ちよいと寄っていらつしやいな？ お茶でも淹いれましょう」

「有難う、少し休まして貰おうか」

断るかと思つた平次は、お鶴さそに誘さそわれるまま、細かい格子戸を潜くぐりました。

中は女やもめの住みそうな、磨みがき抜かれた調度、二三人の若い梳手すきてが、男の客を物珍らしそうに、奥の方から娘らしい視線を送っている様子です。

「出で廻がらしで御座います」

汲くんで出す茶、一口飲んで、長火鉢ながひぼちの猫板ねこいたの上に置いた平次。

「あの娘さん達は、夜もここへ泊なんなさるのかね」

「いえ、用事のない時は、日が暮めいれると銘々めいめいの家へ帰かえりますよ」

「住込みもあるんだろう」

「私はこんな性分しょうぶんで、人様の娘を預かることなどは、面倒臭くて出来ませんから、皆んな帰って貰いますよ」

「すると夜分はお鶴さん一人だね」

「え」

「丁度いい塩梅あんべえだ。これからチヨクチヨク遊びに来るとしよう」

「あれ、冗談ばかり。そんな事を言うとは罪ですよ、これでも女なんですから」

「それはそれとして、いい加減にして、頭巾ずきんを脱とったらどうだえ」

「え？ 何を仰おんっしゃるんです」

お鶴は思わず屹きつとなりました。

「七人の花嫁を出して貰おうか」

九

平次の手はサツと延びて、お鶴の左の手首をピタリと掴つかみます。

「何をするんだえ、いやらしい。巫山ふざけ戯たことをすると、岡っ引だつて勘弁しないよ」

と言うのを引寄せて、グイと掴んだ女の腕をしごくとき、二の腕しゅぼりに赤々と朱彫おりづるの折鶴。

「丹頂のお鶴、御用だッ」
たんちょう

「何をッ」

どこから取出したか、お鶴の手には、キラリとあいくちヒ首、平次の首にサツと来るのを、叩き落して膝の下へ。

「お前が怪しいあやことは、早くから気が付いたが、証拠がなくて踏ふみこ込まずにいたんだ。花嫁が七人も続けさまに消えてなくなるのに、それを手掛けた髪結かみゆいを疑わずにいるほどの平次と思うか」
言う内にも、懐ろから蛇のように引出した捕縄、見る見るお鶴の身体は高手小手に縛り上げられてしまいました。

「何をするんだ、私は女髪結のお鶴、したまち下町でも知らない者はない。

何を証拠に、銭形とも言われる者が縄を打つんだ」

畳を舐めさせられた額の赤痣は火の如く燃えて、醜女の怨の眼ひたい あかあざは、毒蛇のようにキラキラと光ります。

「黙れッ、あの壁を見ろ。ところどころに爪で引つ掻いた蛇の目の印があるだろう。あれはお静に言い付けた合図の葉しおり、俺の名前から思い付いた銭形だ。あの印があるところにお静がいるに相違ない——サア言え、七人の花嫁をどこに隠した」

「知らない知らない。たつて探したかったら、裏は神田川だ。水の底でも覗いて見るがいい」

不貞腐れたお鶴ふてくさ、齒を食い縛って、平次の顔を憎々しく見上げ

ます。

「七人の命には替えられない。言わなきやア、平次の宗旨しゅうしにはないことだが、お前の身体を五分試しだ。これでもか」

平次もさすがに一生懸命です、額にふり注ぐ冷汗そそ ひやあせを片手なぐりに拭き上げると、女の手から打落した匕首あいくちを取って、その白々とした喉のどへピタリと当てました。

「冷たくて、飛んだいい心持だよ、さア一と思いに突いておくれ、——お前に殺されれば本望だ。何を隠そう、私は長い間、お前に
おかほれ
岡惚おぼしていたんだよ」

それは恐らく本音でしょう。平次を斜下ななめしたから見上げる悪女の眼

には、不思議な情火が、メラメラと燃えさかるのです。

「えッ、しぶとい女だ。言えッ、七人の花嫁をどこへやった」

思わずゾツとしながらも、平次は匕首のみねを返して、女の頬を叩きます。

「駄目だよ、そんな事を言っているうちに、七匹の雌めすは一と纏まとめにして江戸から送り出す手筈が出来ているんだ。私はお処刑しおきになるだろうが、その代り私の首が梟さらされる頃は、お静を始め七人の花嫁は、島原か長崎へ叩き売られているよ」

「何？　一と纏ひとまとめにして江戸から送り出す？」

平次はサツと次の間の唐紙を開けました。この騒ぎに、すきて梳手の

娘達はどこへ行ったかわかりませんが、突き当りの障子を開けると、目の下は真つ黒に濁った神田川の流れ、平次の胸には、始めて事件の謎を解く最後の曙光しよこうが射したのです。

十

「石原の親分、そう言ったようなわけだ。面目次第もないが、当分ここへ置いておくんなさい」

ガラツ八は悄しよげ気返って、利助の前に両手を突きます。

「」

利助は黙って腕を拱こまぬきました。平次の恬淡てんたんな心持が、今はもう判り過ぎるほど判りましたが、長い間反目して来た利助は、ガラッ八の前に釈然しゃくぜんとして見せるには、少しばかり負惜まけおしみが強かつたのです。

「兎も角、詫わびをするなら、石原の兄哥あにきにしろというくらいですか、あつしの言うことなどを聞く銭形の親分じゃありません。ついでの時、どうぞ宜しく取なして下さい。私はあの親分から見離されるくらいなら、頸くびでも吊つって死んでしまいますよ」

道化たうちにも妙に真剣なガラッ八の調子を見ると、利助は何となく慥くすぐつたい心持になります。

「まあ、いいやな、その内に何んとかなるだろう。暫くここにブラブラしているがいい」

「有難う御座います、親分」

二人がそんな話をしているところへ、表から利助の子分が二人連れで帰って来ました。

「親分、変な噂を聞き込みましたよ」

「何だ？」

「両国の水よけに、ひぢりめん緋縮緬の片袖が引掛つていたそうですよ」

「えッ」

「そればかりじゃありません。この二三日、うこんいろ鬱金色の扱帯しじぎだの、

鹿かの子絞こしぼりの下締したじめだの、変なものが百本杭ほんぐいや永代へ流れ着くそうですよ」

「そいつは耳寄りな話だ。行ってみるか、八兄イ」

利助は立ち上がりました。

「参めえりましょう」

「お静さん始め七人の花嫁は、どこか河岸かしツぷちの家にでも押し込められているに違ちがいねえ」

それから間もなく、利助とガラツ八は、子分の者に軽舸はしけを漕がせて、大川の右左を、上から下へ、下から上へと見廻り始めたことは言うまでもありません。

日はもうトツプリ暮れて、筑波風が、灰色の水を渡つてヒュウーと吹き起ります。

丁度その時。

銭形の平次も一艘そうの輕舸はしけを漕がせて、大川の上を漕ぎ廻つておりました。これは、浜町河岸から駒形まで、兩岸の人家には眼もくれずに、川の中に浮んでいる船にばかり目を付けております。七人の美女をひとひとと纏まとめにして、人目に付かぬように上方へ持つて行くには、船より外に手段てだてはないと睨んだのでしよう。

橋の上手、この時候には滅多に見掛けない屋根船のもやつているのを、遠くの方から二三度窺うかがつた平次は、最早躊躇ちゆうちよはしません

でした。

見ると目ざす屋根船は碇いかりをあげて、上げ潮に揺ゆるぎ出しそうな有様。

「待て待て、その船に不審がある」

宵闇の中から声を掛けた平次、軽舸はしけをピタリと付けさせると、
舷ふなばたから舷へ、サツと飛び移りました。

「何だ、いきなり人の船に入って来やがって」

水棹みずさおを取り上げて、ガバと打ってかかるのを、身を開いて、ツ、

ツ、ツ、懐ろへ入ると見るや当身一本、船頭は苦もなく水垢あかの中に仰のけ反そります。

中へ飛込もうとすると、

「誰だ、騒々しい」

胴の間から飛出したのは、一人、二人、三人、いずれも荒くれた大男。そのうちの一人は二本差しのようです。

「御用だぞ、神妙にしろ」

「何をッ」

「七人の花嫁を誘拐かどわかしたのは、貴様らだろう」

「何を、それッ、相手は一人だ、斬ってしまえッ」

三人の男は、切先を揃えて、平次を三方から取り囲かこみました。

平次の武器というのは十手が一挺ちよう。

真つ先に飛込んで来た脇差を引つ外して、十手を左に持換える
と、右手が懐ろに入つて、取出した青銭。

「エツ」

真つ先の一人は、左の眼を打たれて引退ひきしりぞきました。

併しかし相手はまだ二人、艦ともの方からはもう二三人船頭が助太刀に
飛んで来る様子です。

平次は十手と青銭とを交かわる交る飛ばして、僅わずかに身を防ぎまし
たが、相手の武家は思いの外の使い手で、平次も次第に圧迫され
るばかりです。

大川の上から下へ、輕舸はしけを漕がせていた利助とガラツ八は、こ

の時漸く平次の危難を見付けました。

「それッ」

と屋形船へ舳へそを叩き付けると、利助、ガラッ八を始め、二人の子分。

「銭形の兄哥、もう大丈夫だ。利助が来たぞッ」

「親分、八五郎が参りました」

「御用ッ」

「御用ッ」

船の上には、一としきり乱闘が続きましたが、平次と利助の捕物上手な駆引と、一つは多勢の力で、大した過あやまちもなく、間もな

く一味五人を、雁字がらめにしてしまいました。

中仕切を開けて見ると、胴の間には、縛られた七人の花嫁、踏み碎かれた花束のように一と塊りになつて顫えております。

「あッ、親分」

その中でも一番美しくて、一番気の確かなお静は、平次の姿を見ると、悪夢から覚めたように飛起きて、駆寄りました。

七人の花嫁を誘拐した髪結のお鶴は、丹頂のお鶴という有名な

女賊で、額から眼へかけての赤痣は、人目を忍ぶために絵の具で

描かせたものでした。

併ししか痣あざはなくとも恐ろしい醜婦しゆうふうで、三十過ぎるまで男というものに眼を掛けられたこともなく、もとより縁談を持込む物好きもなかつたので、自棄やけと呪のろいとが嵩こうじて、世上の美しい花嫁を皆んな手当り次第に祝言の席から攫さらつて、幸福の絶頂から不幸のドン底に落してやろうと、思い立ったのでした。

それを助けたのは、悉ことごとくお鶴の相棒や子分で、美しい盛りの七人の女を、船で島原か長崎へ持つて行って、いい値に売り飛ばそうとする矢先を、危うく銭形の平次に捕まってしまったのです。大川へ緋縮緬ひぢりめんの片袖や、鬱金うこんの扱帯しごぎを流したのは、お静の知恵だったことは言う迄もありません。

ガラツ八を叱り飛ばして、利助のところへやった平次の真意は、言うまでもなく、この先輩と和解するためで、平次のわたかま蟠りのない態度に、今度こそは利助もすっかり兜かぶとを脱いでしまいました。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

七人の花嫁

初出―「文藝春秋オール讀物號」昭和七年一月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第一卷
河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>